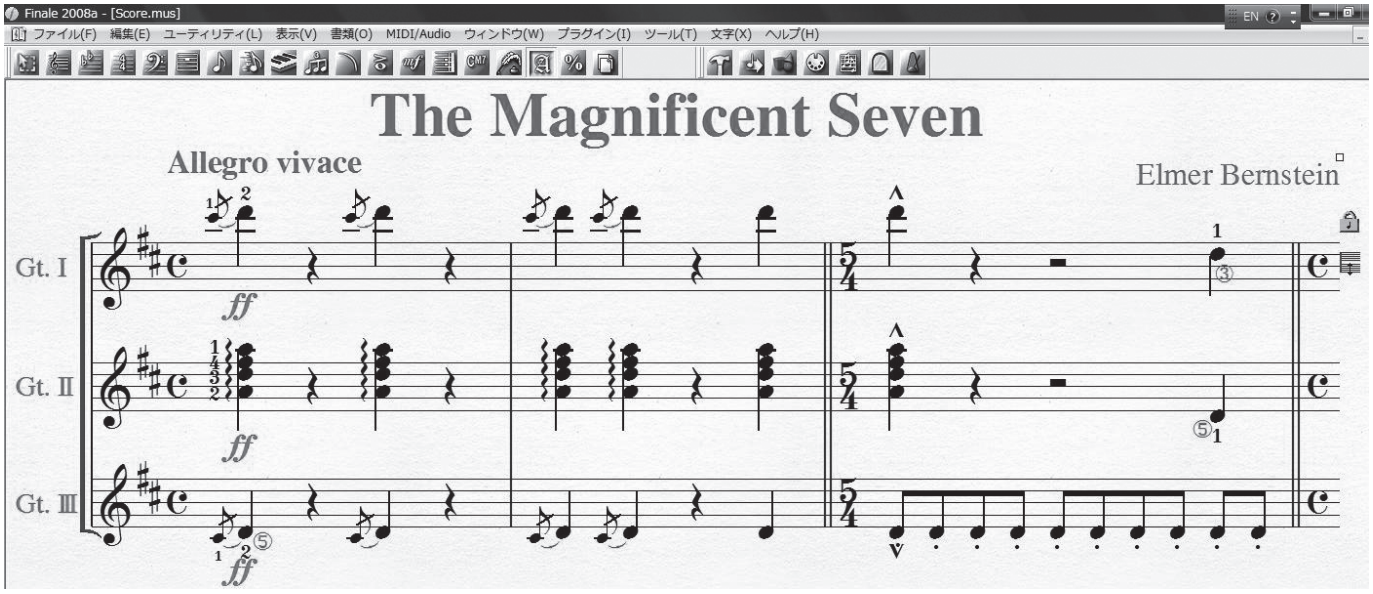
ウインドウズ 対 マッキントッシュ



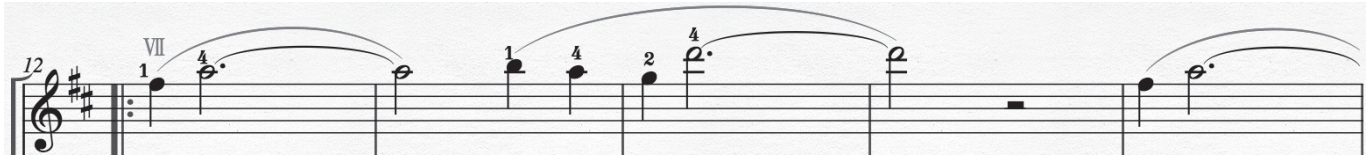
上の画面は Finale2008Windows 日本語版のスクリーンキャプチャーです。多くのプロユーザと同じく、私も長く Mac 版を使ってきましたが、最近は Win 版を併用しています。幾つかの理由がありますが、同価格なら Win のマシン性能が Mac に比べて圧倒的に高いこと、その結果として Finale の操作も比較にならないほど早くなることが挙げられます。

それにも増して Win 版の好ましい点は、デフォルトで豊富なショートカットが用意されていることです。マウス操作の無かった MS-DOS からの伝統なのでしょうか、ほとんどの操作がキーボードショートカットで可能なくらいで、習熟すれば素晴らしい早さで入力／編集作業が出来ます。

例えば上の画面の「ツール」に (T) が添えられていますが、これがショートカットを教えてくれています。アーティキュレーションツールを選ぶなら、Alt を押しながら、T、その次に A を押します。さらに鍵盤入力で威力を発揮するのが編集 (E) のショートカットで、Alt+E+H+S で「シャープ優先」となります。「編集」の Edit、「異名同音」の Enharmonic の H、「シャープ」の Sharp という語呂合わせになっていますが、最後を F にすれば同じ案配で「フラット優先」に出来ます。(Ver.2006 までは Alt+O+E+ 〜となっていましたが、当時はこの「異名同音表記」がオプションメニューに収納されていたためです。そしてそこでも Option の O ということでした)

それらを習得するのにメモは必要ありません。忘れたらマウス操作に戻って、そこでカッコ内の文字を見て覚えなおせばすむだけのことになります。実に良くできた仕様です。特に高品位楽譜浄書に欠かせない道具箱内の各種ツールも、例えば連桁調整なら、Alt+T+N+S+B で選べます。少し長いですが、マウスでパレットをクリックするよりは早いでしょう。

Mac でもツールをショートカットで選ぶことは出来ますが、それにはマクロ機能を自分で設定しなければならず、しかも JIS キーボードの場合は僅か 7 種、US キーボードを使っても 8 種に過ぎません。また、先の例での道具箱にマクロを仕込めても、その中の連桁調整や符尾長調整といった各ツールの選択は面倒なマウスクリックによる他はありません。



Win の圧勝ということになりそうですが、実はそうではありません。出版業務では楽譜を EPS、または高品位の PDF というファイル形式に変換して納品しますが、この生成には今のところ Win は完全に対応してはおりません。2006 から 2008 に至るまで、無理に生成しても符尾の幅がデタラメになってしまうという大問題があるために、最後は Mac に任せるしかないのです。Mac は単独で初期入力から最終納品までこなせるのですから、二者択一なら Mac の完勝です。

さらに 2006 以来の画面表示の正確さと美しさは Win の追随を許しません。上例もスクリーンキャプチャーですが、Mac でのタイやスラー曲線の表示精度は高く評価できます。よってベストの作業環境として、私は入力から校正／編集までを Win で行い、納品直前の最終行程を Mac でやっております。ただし、この両者の併用にはフォント等で問題があるために、ちょっとした工夫が必要です。次回にはそれを書いてみたいと思います。

2009 年1月 梅本雅弘